



Title	カナダフランス語の語彙の研究 : lexicography(辞書編纂学)
Author(s)	西尾, 啓子
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39101
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	にし お けい こ 西 尾 啓 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 1 1 9 3 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 7 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	カナダフランス語の語彙の研究 —lexicography— (辞書編纂学)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大高 順雄 (副査) 教 授 岡野 輝男 教 授 赤井 慧爾

論 文 内 容 の 要 旨

筆者はまずカナダフランス語が、一般にフランスで使われている標準フランス語と違う点に注目し、その相違点を明確にしようという観点から研究に着手した。これはフランスには見られないカナダ特有の語彙に加えて、標準フランス語との意味のずれ、つまり、意味の拡大化、縮小化、専門化、隠喩、喚喩を解明した。更に先住民や周辺諸国との接触から、言葉も影響を受けている実態、それらとの関わりも、言葉を替えて言えば標準フランス語には見られないという意味において一種の相違点でもある。要するに言葉というものは、今のこの時代、一国あるいは一地域だけで成立しているものではない。近隣諸国や何らかの関係でつながりのある地域などと相互に影響を与えあっているところに形成されているものである。本研究ではカナダフランス語を軸にイヌイット語、アメリカインディアン諸語、英語、米語、フランスの古語・方言、現代のフランス語、それぞれとの関係が網の目のようにはりめぐらされている状況に注目して、こういった言葉の諸相を辞書という形で記述することが本研究の目的である。

Dictionnaire québécois d'aujourd'hui^{#1} は、フランスの Robert との共同作業の末に生まれた辞書である。ある共通のコアをもとに、これを発展増幅させて、フランスで使用するための辞書とカナダで使用するための辞書を同時に出版するというものであった。したがって、核となる基本語彙に、フランスの研究者、カナダの研究者がそれぞれ自国の言語状況を反映させるように語彙を添加して完成させたものが、フランス版は Robert d'aujourd'hui^{#2} であり、カナダ版は DQA である。この 2 冊の辞書の見出し語及び語義、用例に至るまで内容を一語一句比較していき、DQA にのみ収録されている語彙、用法を抽出すると、カナダフランス語に特有な語彙、用法のみが収集できるはずである。これに日本語訳を付加し、カナダフランス語-日本語の辞書を作成するのが本研究の基本概念である。

新語は臆せず取り入れ、学者しか用いないような特殊な専門用語ではなく、一般教養としての知識に必要な用語は、幾分古い言葉であっても収録する。時間的広がりと共に、次に考慮すべき点は空間的広がりである。カナダフランス語を代表するケベック語が中核となるが、広範囲に馴染みのあるような方言は掲載する。これまでケベックで編纂された辞書は多かれ少なかれ、規範的性格を備えていたので、くだけた語感を持つ言葉などはほとんど収録されていなかった。しかし、主に話し言葉や親しい間柄でしか用いられないような、日常的なくだけた語彙や表現にこそ、フランスのフランス語には存在しない言葉が見られるものである。こうして現用のカナダフランス語を忠実に記述することと、必要に応じてフランスとの関連、標準フランス語との比較、英・米語との借用関係などを可能な限り調査探究した結果を併記することにより、カナダフランス語の特徴がよりいっそう浮き彫りにされることを眼目としている。

最終的に収録見出し語総数は約3700語となった。

こうして辞書を編纂していくにあたり、まず、第一の問題は、言語レベルの表示である。これは日本語の言語事情と適合しないために、明確に一語で翻訳できない事情がある。特に数の多さの目立つ *langue familière*^{#1} という言語相をいかに表示するか、既存の表示方法では言語レベルを正確に表し得ない。さらに言語レベルは人によっても受けとめ方が違うという点が問題をより複雑にしている。今回は結局既存の表示方法を踏襲することとしたが、詳しい説明を凡例に付記した。第二に、政府は特別機関を設けて専門用語を確立し、これを普及させようと努力しているが、その努力が効を奏して一般の人々に定着していったものと、相変わらず専門用語に留まり、一般の人びとは別の単語を用いている場合も少なからずある。この専門用語と一般語の共存という二重構造ともいべき状況がカナダフランス語には顕著に見られる。しかしこういった事情を明確に記載した辞書はなく、さらなる探究が必要となろう。第三にカナダフランス語は規範を抜きにしては語れない。規範を作り、規範に合致したフランス語を普及させることが長年のカナダフランス語の辞書の歴史であったからである。カナダでの規範とは英語法の排除を第一に意味する。が、実際は様々な形態で英語法が浸透している。

カナダ語法^{#4}の語彙はその意味内容が、カナダの現実、実情を如実に反映していることから、語彙を通して、目に見える現象、事象の差はもちろんの事、フランス系カナダ人の特別な感情、心情といったものまでおぼろげながら見通すことができる。辞書という形にまとめていく段階で次第に明らかになってきたカナダフランス語の特徴をまとめるべく、分野毎、項目別に関連語彙を集積してさらに詳細に調査し整理したものを呈示する。気象状態や地形に関する自然環境、日常生活に密着した文化、様々な人々との接触を通じた仏系カナダ人としての人間関係、そして彼らを取り巻く社会と、大きく4つの分野を題目として設定して、さらに各々のなかに細分化した項目を立てて論じた。次いで形態論の面から際だった特徴を4項目取り上げ、例をあげて説明した。

^{#1} *Dictionnaire québécois d'aujourd'hui*, (sous la direction de Jean-Claude BOULANGER), Saint-Laurent (Québec), DicoRobert inc., 1992.

^{#2} *Robert d'aujourd'hui*, Paris Dictionnaires le Robert, 1991.

^{#3} くだけた場面、非公式な状況、親しい間柄で誰でもが用いることのできる言葉

^{#4} カナダフランス語に特徴的な語彙、成句、用法、カナディアニズムともいう。

論文審査の結果の要旨

本論文はカナダフランス語について、大陸フランス語と比較しつつ、前者に特有な語彙及び用法を拾集し、それらの各々に用例を付して、解説を加え、包括的に調査研究した結果を、辞典の形式によって総合したものである。

まず、カナダ政府の言語政策に則って作られた *Trésor de la langue française au Québec* の刊行物である *Dictionnaire du français plus* (フランス語カナダ語辞典) 及び、フランス Robert 社とラヴェル大学言語学教授らの協同作業の結果として生まれた *Dictionnaire québécois d'aujourd'hui* (現代ケベックフランス語辞典) を分析し、それらに批判を加えた。次いで、連関の学術論文を調査し、最近の研究結果を取り入れ、自己の研究成果に加えた。こうして、カナダフランス語に特徴的な語彙、約3,500語を選択した。

本研究は、フランス本国においても、また、カナダにおいても、前例を見ない特色ある独創的なものであり、この分野において、先駆的役割を果たすものである。第1章において、カナダフランス語に定義を与え、語記論 *lexicographie* を展開し、第2章において、語彙場 (*champs sémantiques*) (自然、文化、人間、社会) を設定し、第3章に相当する部分を辞典に充てた。

各語の説明は、イヌイット語 (*Inuit Language*)、アメリカインディアン諸語、アメリカ英語、イギリス英語から借用した語、17世紀フランスのカナダ植民地時代に遡る語、カナダフランス語に特有な語、大陸フランス語と異なる意味に用いられる語を明示しつつ、適切な日本語訳を加え、電算機の諸機能を駆使して完成した総合的語彙研究となっている。

本論文に対する批判としては、語彙数を更に増加し、技術用語、学術用語の適正な訳語を選定し、更に各語の用法を添加することである。しかも、今日、新語の増加が著しい点を考慮し、総語数の充実を図ることである。アクセント、イントネーションについても調査して、結果を特記するならば、本研究の価値は、一層高まるであろう。

しかしながら、結論として言えば、本論文は本邦において前例を見ない「カナダフランス語の実体の研究」として顕著な研究成果を示しており、今後、斯学の発展の礎石となることは明らかである。本論文が学位請求論文として、十分に価値のあることを認定するものである。